

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00700

研究課題名(和文) 言語少数派の子どもを対象とする遠隔型の「母語による学習支援」の開発

研究課題名(英文) Development of a remote "mother tongue-based learning support" for language-minority children

研究代表者

清田 淳子 (Kiyota, Junko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30401582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では言語少数派の児童生徒に対する新たな教科学習支援の方法として、子どもの母語を活用した学習支援を遠隔授業として行うことの可能性を追究した。分析の結果、国語教材文を扱った遠隔型支援では多様な読みの活動が展開され、高度な思考操作や理解力、子どもの考えを誘発し思考を深める学習課題が設定され、読むことだけでなく作文活動への展開も可能であった。そして母語支援者の教授行動の分析からは、このような学習課題は生徒の考えを引き出し、引き出した考えに新たな情報を付け加えるという、参加者間のやりとりを基調とする授業展開の中で扱われていることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の意義として、(1) 遠隔型支援の可能性を追究することで、言語少数派の児童生徒を対象とした教科学習支援の新たな学びの場を開発する、(2) 母語支援者としての経験や実践知をもつ人材が、学業を終えた後も継続的に学習支援に携わる道を開く、という二つの点が指摘できる。すなわち、「遠隔型の母語による学習支援」の実施は、人材の活用と母語支援者の安定的な確保に加え、身近に母語支援者がいない地域においても母語を活用した学習支援を可能にすることで教育に対する地域格差の解消につながるという意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This study examined the possibility of remote classes that utilize the child's native language as new subject learning support for language-minority students. The analysis results showed that a wide variety of reading activities were developed in the remote support for Japanese language material texts. In addition, learning tasks were set up that triggered advanced thinking operations, comprehension skills, and deepened their thinking. It was possible to develop not only reading but also writing activities. The analysis of the teaching behavior of the native language assistants confirmed that these learning tasks are handled in the context of a class development based on interactions between the participants, in which students' ideas are elicited, and new information is added to the ideas.

研究分野：年少者日本語教育

キーワード：言語少数派生徒 遠隔授業 母語活用 教科学習支援

## 1. 研究開始当初の背景

日本における「言語少数派の子ども」(外国から来て日本で暮らす、日本語を母語としない子ども)に対する教科学習支援の方法に、子どもの母語を活用する取り組みがある。「教科・母語・日本語相互育成学習モデル(以下、相互育成学習モデル)」(岡崎 1997)もその一つで、このモデルに基づく学習支援では毎回の支援に「母語による学習」と「日本語による学習」の二つの場面を含み、母語支援者が主導権を持って授業を進める場が設定されている。「母語による学習」場面を設ける意義として、来日間もない子どもの教科学習への参加が可能となること、「日本語による学習」に参加するための基盤を作ること、「日本語による学習」への意欲と自信をはぐくむこと、そして学習言語としての母語使用の場を確保できることが指摘されている(朱 2007)。

しかし、「母語による学習」の実施に際しては、母語支援者の安定的な確保に課題を抱える。従来、「相互育成学習モデル」における「母語による学習」場面は主に留学生が担ってきた。しかし留学生の場合、支援を継続したいという意思はあっても、就職や帰国によって長期にわたる支援が難しい。母語支援者の人材確保に向けて、子どもの母語ができる日本語母語話者(宇津木他 2011)、地域の定住者(高梨 2016 など)、そして子どもの親(滑川 2015 など)が「母語による学習」を担う事例も報告されているが、本研究では対面での支援に比べて時間や場所にとられない方法として遠隔型支援に注目する。

通常、双方向の遠隔授業はパソコンやタブレットを用い、画像と音声を伴う形で行われる。しかし、言語少数派の子どもの場合、スマホは持っていても家庭にパソコンがなかったり、回線容量の関係でスマホの利用は音声のみに限られる場合も多い。そこで本研究では「相互育成学習モデル」に基づく国語の学習支援において、「母語による学習」場面をスマホのアプリを利用した遠隔授業として行うことの可能性を追究する。

## 2. 研究の目的

本研究では、以下に示す研究課題の検討を通し、遠隔型の「母語による学習支援」の可能性を追究する。

- (1) 母語を活用した遠隔型支援では、どのような読みの活動が行われ、どのような学習課題が扱われているのか。また、読むことから書くことへの活動の拡がりは可能であるか。
- (2) (1)で明らかにした学習課題を、母語支援者はどのように扱って内容理解を進めているのか、母語支援者の教授行動と復唱行動の観点から探る。

## 3. 研究の方法

- (1) 遠隔型支援は、週1回60分、支援者と対象生徒の自宅をスマホのアプリ(スカイプやWeChat)で繋いで行う。対象教科は国語で、学年相応の国語教材文を母語に翻訳したものと、その教材文を読み取るための学習課題を記したワークシートを用意し、支援者と子どもはそれらを手元に置いて支援に臨む。
- (2) 遠隔型支援の実施及びデータ収集については、研究協力者や横浜市の公立中学校の協力を得、学習支援における談話データを毎回録音して収集し、分析を行う。
- (3) 遠隔型支援を担当した母語支援者と参加生徒を対象に、各年度末に半構造化インタビューを行う。

## 4. 研究成果

本研究の成果を、「2. 研究の目的」に示した二つの研究課題に沿って示す。

(1) 「母語を活用した遠隔型支援では、どのような読みの活動が行われ、どのような学習課題が扱われているのか。また、読むことから書くことへの活動の拡がりは可能であるか。」

遠隔型の「母語による学習」では、スマホのアプリによる音声だけのやりとりであっても、学年相応の国語教材文について多様な読みの活動が展開されていた。そして、これらの読みの活動では、高度な思考操作や理解力を要求したり、子どもの考えを誘発し思考を深める学習課題が数多く設定されていた。また、支援の中で書き上げた文章を子どもが撮影し、支援者に送って共有することで、「読み」から「書き」へと活動を広げる可能性も認められた。

以上のことから、「相互育成学習モデル」における「母語による学習」場面を遠隔授業として行うことには、まず、母語支援者のリソースの拡大という意味が指摘できる。すなわち、遠隔型支援の実施は、かつて対面形式の「母語による学習」場面を担当した留学生が、卒業して仕事や子育てなど時間的な制約がある中でも、再び学習支援に携わる道を開いたという点で意味を持つと言えよう。また、母語によるサポート制度を持ちにくい少数散在地域においても、場所を選ばない遠隔型支援は母語活用を実現する一つの手立てとして期待される。一方、子どもの側から見れば、母語を活用した学習支援を受ける機会の拡大という意味を持つ。遠隔型支援を受けることで、日本語力が不十分な時期であっても教科学習の継続が可能となり、それは子どもの認知的な発達を支えることにもつながる。

(2) 「(1)で明らかにした学習課題を、母語支援者はどのように扱って内容理解を進めているのか。」

遠隔型支援における母語支援者の「対話的な授業における教授行動」について分析した結果、「表現させる」行為が最も多く、「復唱する」「付け加える」が続いた。次に、母語支援者の「復唱する」行為を形状と機能の観点からとらえてみると、母語支援者は「言い換え/受容」「再現/受容」の発話を中心に、「語尾上昇/疑問・否定」を時折交えながら復唱を行っていた。また、復唱の後続発話においては、〈受容〉〈言い換え〉〈再現〉の後に、支援者による「表現させる」「ワキの生徒に質問する」や、生徒による「補足説明」「単純応答」の出現頻度が高かった。さらに、文学的文章を扱った支援では「発言を促す」が、説明的文章の支援では「評価」が多用されていた。

このことから「高度な思考操作や理解力」が求められる学習課題は、支援者による一方的な説明や解説ではなく、生徒の考えを引き出し、引き出した考えに新たな情報を付け加えるという、参加者間のやりとりを基調とする授業展開の中で扱われていることが明らかとなった。この点において、「母語による学習」がめざすところの、子どもは自由に操れる母語を使って自分の思考を言語化し、それを支援者に伝えることで支援者と内容上の交渉を行うこと(王 2016)が、音声のみで行われる遠隔型支援でも実現されていることが認められた。

そして、生徒の考えを引き出す上で、授業者の〈受容〉や〈言い換え〉〈再現〉の復唱行動が重要な契機となっていることも認められた。母語支援者の役割の一つとして、王(2016)は「子どもが躓いた時にすぐ評価や正解を示さず、考える手掛かりを与えたり、代弁したりするといった『足場作り』の役割を果たすこと」(p85)を挙げているが、「言い換え/受容」「再現/受容」の復唱行動は、「足場作り」の一つであると把握される。特に、生徒の発言が届くたび、「聞こえた/受け取った」ことを音声言語化して伝える支援者の〈受容〉行為は、スマホを用いた音声だけのやりとりの中で「受け取ってもらった」という安心感を生徒に与え、次の発言に向けて背中を押しているとも言えよう。

今後は、家庭の回線容量やパソコンの有無に左右されない形として、スマホを用いた音声だ

けのきわめてシンプルな形での遠隔型支援を、対象生徒の属性（学年段階や母語力など）、参加人数、学習内容を変えながら実施し、その可能性と課題を検証することに加え、生徒たちはどのように考えを出し合うことでより高次の理解を構築しているのか、参加生徒の協働の様子をとらえていくことや、「書くこと」を扱う場合の支援者の教授行動の検討も重要である。

#### <引用文献>

- 宇津木奈美子・三輪充子・山口優希子（2011）「母語を活用した子どもの学習支援における日本人支援者の役割認識」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
- 王植（2016）「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」に基づく支援活動における子どもと母語話者支援者の「横の関係」清田淳子（編著）『外国から来た子どもの学びを支える』文理閣、59-86.
- 岡崎敏雄（1997）「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料』茨城県教育庁指導課
- 朱桂栄（2007）『新しい日本語教育の視点 子どもの母語を考える』鳳書房
- 高梨宏子（2016）「外国人支援者の教科学習支援参加に関する一考察 支援者がもつ「親の目線」に着目して」『東海大学課程資格教育センター論集』15号、19-27.
- 滑川恵理子（2015）「言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習 身近な大人との母語と日本語のやり取りから」『日本語教育』160号、49-63.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 清田淳子	4. 巻
2. 論文標題 「母語を活用した遠隔型の学習支援における母語支援者の教授行動 母語支援者の発話に注目して」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『平成30年度 令和3年度科学研究補助金研究成果報告書(基盤研究(C)) 言語少数派の子どもの対象とする遠隔型の「母語による学習支援」の開発』	6. 最初と最後の頁 55-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇津木奈美子、高梨宏子	4. 巻
2. 論文標題 「教科学習支援に参加した母語支援者についての情報共有の分析 教科学習支援の記録を通して」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『平成30年度 令和3年度科学研究補助金研究成果報告書(基盤研究(C)) 言語少数派の子どもの対象とする遠隔型の「母語による学習支援」の開発』	6. 最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇津木奈美子、原瑞穂	4. 巻 17
2. 論文標題 「CLD児散在地域における教育保障に向けた学校教育への挑戦のプロセス 教育委員会・国際交流協会・大学の担当者のふり返りから」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MBH) 研究』	6. 最初と最後の頁 25-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清田淳子	4. 巻 174
2. 論文標題 言語少数派の子どもに対する母語を活用した遠隔型教科学習支援の試み スカイプを利用して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 31~44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 宇津木奈美子
2. 発表標題 「外国につながる子どもの教科学習支援を行った中国人支援者の意識 母語による支援活動を通して」
3. 学会等名 日本学習社会学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清田淳子
2. 発表標題 国語科と国際支援教室の接続
3. 学会等名 国際研究集会2020「ひとつの言語教育から複数の言語教育へ：CEFRからみた日本語，英語，外国語教育の連携と協働 CLILと複言語教育」（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇津木奈美子・高梨宏子
2. 発表標題 母語を活用した中学国語の学習支援における支援者支援 学習支援記録の分析から
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2020年度研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇津木奈美子・原瑞穂・中野博史・佐藤睦子・永田耕平・田慧听・宮崎幸江
2. 発表標題 文化的言語的に多様な子ども（CLD 児）の教育保障 誰もが当事者として関わるために
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2020年度研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清田淳子・王植
2. 発表標題 スマホ版スカイプを利用した遠隔型の学習支援 - 母語支援者と子どもの相互作用に注目して -
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇津木奈美子
2. 発表標題 母語による教科学習支援に参加した日本人中学生の意識
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇津木奈美子
2. 発表標題 日本語を母語としない子どもたちの現状と学習支援
3. 学会等名 韓国日本語教育学会第62回国際学術発表大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高梨宏子
2. 発表標題 「外国につながる子どもの支援における外国人支援者参加の可能性」
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清田淳子
2. 発表標題 日本の公立中学校における母語を活用した学習支援
3. 学会等名 国際研究集会2019「多言語化する学校とバイリンガリズム フランス・カナダ・日本」(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大山万容、清田淳子、西山教行(編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 184
3. 書名 『多言語化する学校と複言語教育』	

1. 著者名 清田淳子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 233
3. 書名 「グローバル化の進行と子どもたちの指導・支援」春日井敏之編著『新しい教職教育講座 教科教育編 生徒指導・進路指導』	

1. 著者名 宇津木奈美子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 224
3. 書名 「外国につながる子どもたちと学習支援」高井正・中村香編著『生涯学習支援のデザイン』	

〔産業財産権〕



〔その他〕

清田淳子「外国にルーツをもつ子どもたちにとって、今必要な日本語教育」（神戸定住外国人子ども奨学金実行委員会、2021年11月）
清田淳子「日本語指導が必要な児童生徒の支援について」（芦屋市教育委員会、2021年7月）
清田淳子「外国にルーツをもつ児童生徒への対応 - 教科学習における支援のあり方を中心に」（独立行政法人教職員支援機構 立命館大学センター、2021年6月）
清田淳子「多文化共生社会に向けた外国ルーツの子ども教育支援」（住友商事、2019年12月）
清田淳子「外国につながるをもつ子どもへの教科学習支援」（京都府国際センター、2019年11月）
清田淳子「こどものことばの力を育てる」（京都府国際センター、2018年10月）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宇津木 奈美子  (Utsuki Namiko)  (90625287)	帝京大学・帝京スタディアブロードセンター日本語予備教育課程・准教授   (32643)	
研究分担者	高梨 宏子  (Takanashi Kouko)  (90748542)	東海大学・現代教養センター・講師   (32644)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	王 植  (Oh Syoku)		
研究協力者	熱海 まき子  (Atsumi Makiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際研究集会2020「ひとつの言語教育から複数の言語教育へ：CEFRからみた日本語、英語、外国語教育の連携と協働 CLILと複言語教育」	開催年 2020年～2020年
--	--------------------

国際研究集会 国際研究集会2019「多言語化する学校とバイリンガリズム フランス・カナダ・日本」	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------